

毎日新聞 23th.OCT 1998

宮崎準之助の仕事

「くすぐるま」が動くとき 反復作業に徹して

田中幸人

ノミとノコ、ただそれだけによる手作業で、かくも膨大な木彫り作品を遺した「宮崎準之助」とは、いったい何者だったのか。職人？それとも稀代のアーティスト？圧倒的な反復作業もさることながら、作品に込められたどんでん返のユーモアが、今、私たちの美術常識を刺してはばからない。やせ細りそうな現代の美術状況の中で、彼が遺した「くすぐるま」たちは、前近代を引きずりながらも決して矮小化出来ない豊かな表情をしている。

1989年夏、宮崎は北九州・小倉市立病院でひっそりと世を去った。胃ガン。享年59歳であった。かつて60年代に“反芸術”を標榜した前衛美術集団「九州派」の元メンバーではあったが、遺した仕事は反芸術とは似ても似つかず、木の扱い方といい制作態度といい、いかにもオーソドックスで、しかも日本の伝統的木彫パターンとは全く異質なものであった。この度、没後9年ぶりに、福岡県立美術館の川波千鶴学芸員の手で彼の遺業が掘り起こされ、その全貌がはじめて明るくなった。

会場に足を踏み入れた瞬間、アッと驚天する。樟を刻んだ大小の球体が、床に壁面にごろごろ転がっている。あるものは表面に象形文字様のものが刻んであったり、あるものは函の中に納まり、阪急隊の穴となったり、筵の上に収穫物のイモのように群れていたりする。そのかず数百個。あたり一面、樟の芳香が漂い、作家の執念が爆発したのかと錯覚しそうだ。

「球体」の次には板状の「波板」とか、それに变じて展開した「波の柱」などが林立している。高さ2~3メートル、単独で並ぶもの、群れて立つものさまざまだ。「球体」が穴になり、あるいは「波板」や「波の柱」に変身していくさまは、鋭敏な観客ならピンとくるだろう。「球体」は人であり、群れるものたちであり、「波板」や、「波の柱」は、立つものたちの様態なのである。コツコツ刻んできたその推移の中にもう一つ立ち現れてくるものがある。眼には見えない重力である。重力が横に転び、上下に運動を開始している。作者は重力という見えない軛に右往左往しながら、自らの手でそれを解き放とうとしている姿がはっきりみとれる。一方で宇宙時点のリズムをにらみ、刻むという息の長い「ひと」のリズムとの間の、相矛盾する世界観（空間知）を押し広げ、芸術を身体の生成/変化のリズムに返そうと苦闘しているのである。彫り、刻み、磨くという気の遠くなる反復作業の中にこそ（この手のうちこそ）、永遠=不変と思い込んできたモダニズム志向に一撃を加えることができる。

「さて、ぼくは何処へ行こうとするのか、アーティストであれアルチザンであれ、ぼくの運命は定まっているだろうが、ただの人間の地平線だけは喪いたくないと思っている。そんな野暮ったれの営為に、もしかして僕らの時代の根源に迫るものがあり得るとすれば幸いと
言うべきであろう」

1970年の、ある展覧会図録に寄せた短文の中に、座して動じない彼の姿を見る。宮崎が“根源”と称しているものこそ、重力を動かしてみたい欲望のことだ。「波の柱」のシリーズは上下方向への実験運動であるが、ブランクーシの「無限性」(1937年)のように、天へと志向しなかったところが、人間の地平を抱き抱える宮崎らしいところだ。やがて、球体=重力をごろりと横に転がした。昔なつかし「荷車」の登場である。だが、宮崎にとってもはや乗せるべき荷は何も無かった。「遊ぶ」(芸術)という観念以外に。

会場に大小20台の「くるま」が並んでいる。すべてが組立式になっているので大人がバラして遊ぶこともできる。もちろん可動式だから引っ張って動かすことも可能だ。中にはシーソーがのっかっているものもある。86年の東京個展のさいは「くすぐるま」というニックネームがつけられた。素材の「くす」と「くるま」、それに遊具性をもじった名前だ。このとき宮崎は「ぼくは遊具を作った積もりはないんだが」と答えている。

宮崎にはその昔、ひとつのエピソードがある。62年の九州派の解散式「英雄たちの大集会」(百道海岸)のときだ。トランク一杯の作品を持ち寄るのがテーマだったのに、スコップ一本をかっついてきた彼は、波打ち際で黙々と一人穴を掘った。潮が満ちて次々に穴を崩していくのも構わず、夜通しそのパフォーマンスに徹して立ち去ったという。九州派が標榜した「日常性への下向」や「匿名性」を解散式でもはずすことはなかった。

「くすぐるま」は、一見、車社会に対するアイロニーにもみえるが、自然と人間の関係を再検討されはじめた時代背景を考えたとき、モノとひとの再統一をはかるアーティストの壮大な実験(遊び)だったともいえる。

彼はかって次のように述懐したことがある。

「彫刻とは何か巨大な無限のものに裏切られてはじめてものになることがある」と。穴掘りのエピソードは自然に抗したアーティストの覚悟のようなものを直感させる。宮崎にとって膨大な反復作業は自らへの「反復=くつがえし作業」でもあった。台座をいっさい取り払い、ノミ跡ひとつ残さなかったことも、従来の日本の彫刻の伝統を打破する試みであった。

田中幸人 当時埼玉県立美術館長